

現代社会を『関係性』という観点から考える③⑥

家族のなかの「秘密」と「嘘」 続・映画「どうすればよかったか」から考える

更生保護官署職員 三浦恵子（社会福祉士・精神保健福祉士）

今回は『第60号:連載32:家族における「ケア」の在り方 映画「どうすればよかったか」から考える』に続くものです。なお、本稿は、映画「どうすればよかったか」の内容・構成などを言及するものでも、映画評論でもないことについて、冒頭でお断りしておきます。

「現代社会を『関係性』という観点から考える」というテーマでの連載ですので、本稿でもそれを意識しています。これまでの連載については末尾に記載しています
記載している事項は筆者の私見であることを申し添えます。

1 ドキュメンタリー映画「どうすればよかったか」

知識や技術を持つ専門家であっても、自分の家族が疾病・障害を抱えたとき、適切にケアをする、あるいは、適切なケアを求めて専門機関にケアを求めることができるとは限りません。

そのことを実感した映画が、令和6年12月7日に公開されたドキュメンタリー映画「どうすればよかったか」(藤野知明監督)です。私は封切翌日にミニシアターの席を予約して鑑賞しましたが、席は満席であり、来場された方のなかには精神保健分野で働く専門職や家族と思われる方も多くおられたようでした。

映画を製作された藤野監督の実姉は優秀な医学生でしたが、四度目の受験で入学した大学時代に統合失調症と思われる症状を発症してしまいます。藤野監督の実父母は基礎医学の研究者でしたが、監督の実姉を精神科医療や精神保健福祉サービスにつなげることを拒み、約四半世紀にわたり実姉を自宅に閉じ込めることとなります。

当事者に「適切な医療を受けさせない」「外に出られないように鍵をかける」という言葉からまず想像されるのは、私宅監置の時代に設置された「座敷牢」でしょうか。映画を鑑賞された方のなかには、一般家庭において「座敷牢」を実際に確認した経験があるという研究者の方もおられました。

しかしながら、映画のなかでの実姉は、自宅内では比較的自由に行動することができていました。実父は停年退職した後は、資金を投じて様々な設備が整備した研究所を自宅に設置し、実姉はそこで「研究」を続けるという「形」をとるようになっていきます。実姉は、大学医学部こそ卒業できましたが、医師免許を取得することはできず、就職もできなかったため、実父はこの「形」をとることで、実姉の統合失調症の発症を家族以外に「秘密」にすることにしていたのです。

実姉にとって、衣食住も社会につながるはずの仕事も、全てが家族や家庭のなか、閉ざされた関係のなかで完結しています。戦前に医学校を卒業し父と基礎医学の研究を長年行っていた母もまた、自身が老いて病いを得ても受診することなく家からは殆ど出ることはなかったのです。

実姉の最初の発症とみられる時、まだ高校生だった藤野監督は、優秀だった実姉の変

化、実姉に対する実父母(監督と母が救急車を要請し受診させるものの、実父の指示ですぐに帰宅することになったこと等)の対応に戸惑います。実父から「問題ない」と説明を受けますが、それでも何かを隠しているという懸念を拭えません。大学職業は首都圏で就職をしたため実父母方を離れるものの、その後、実父母の同意を経て、帰省等のたびに両親や姉にカメラを向けていきます。

映画の冒頭でも触れられていますが、これは統合失調症の治療の在り方を世に問う作品ではなく、家族メンバーが病い、それも偏見がないとはいえない統合失調症であったとき、本当に「どうすればよかった」という問いかけもあったと思います。

2 映画「どうすればよかったか」と、書籍を読み向き合う

映画「どうすればよかったか」については、視聴後も同僚や援助専門職の仲間の中で話題に上る機会も多く、考えさせられることが多くありました。

「高学歴の両親による教育虐待ではないか」

「精神疾患(障害)に対するスティグマが根底にあるのではないか」

「閉じ込めることによる人権侵害が生じている」

など、それぞれの職歴や立ち位置によってこの映画の受け止めも異なっており、それゆえにこの映画を多くの角度から考える機会がありました。こうした反響の大きさは、ドキュメンタリー映画、ミニシアター系映画としては異色と呼ばれる満席が続き、上映も長期間に及んでいることからわかります。

さらに公開から1年余りたった令和8年1月29日、藤野監督による書籍「どうすればよかったか」(文藝春秋)が発刊されました。私はこの書籍を予約し発売日に入手しました。じっくりと向き合いたい事象については、自分のペースで読み進めながら時に手をとめ考えたり調べたりすることができる「読書」という形で触れたいと考えているからです。映画「どうすればよかったか」を視聴して以降、折々に触れて考えてきた事項、特に、家族関係における秘密や嘘の扱いについて、監督の文章をたどりながらより慎重に考えてみたいと思いました。

書籍においては、映画の反響等といったことも多く盛り込まれていました。何よりも藤野監督が社会人になってから撮影したカメラでの映像からこの映画が作成されている関係で、映画中では多くは触れられなかった監督自身の成育歴についてより詳細に記されていました。そしてそこには、実姉の発症にまつわる家族関係における藤野監督の苦悩が記されていました。

私は特に「家族のなかの秘密と嘘」という点に注目しました。

本連載第30回では「家族がケアを担う」ときというテーマを、この映画を素材にして記載しました。今回は映画を軸に、家族における「秘密」について考えていきたいと思います。

映画「どうすればよかったか」に登場する家族 家族構成

父:基礎医学の研究者(本文中の記載は「実父」)

実母:基礎医学の研究者(本文中の記載は「実母」)

長女:父母の期待を担う優秀な長子であったが医学生時代に統合失調症に罹患
(本文中の記載は「実姉」)

長男:自分の原家族にカメラを向ける藤野監督自身(本文中の記載は「監督」)

3 一般論としての、家族における「秘密」の取り扱い

対人援助の場面では、家族のなかの「秘密」に触れることがあります。ケース記録等にお

いて「要配慮事項」等の注意喚起の記載が付されている事項については、当事者や家族の面接場面等ではその取扱いに十分な配慮が求められます。

家族メンバーだけの(対外的な)「秘密」

家族メンバーはその事項について承知しているものの、家族メンバー以外には触れられないようにしている事項です。「秘密」を守るためには、家族メンバーには、その秘密を守ることができる(未熟さや軽率さゆえうっかり他言しない)という条件が求められるでしょう。

刑事政策関係の仕事をしている者にとってよく触れるのは、「ある家族メンバーが矯正施設入所中である」という「秘密」です。その理由は、「矯正施設入所中の本人のことを幼いころから心配していた祖母に心配をかけたくない」というものから、「口うるさい親族に色々言われたくない」というものまで様々ですが、矯正施設入所を恥じる心理だけではなく、本人の行った罪に対する責めが家族にも及ぶことに対する辛さも背景にあると私は考えています。

昨今では、ネット上で「特定班」等と称される人々が、当事者(加害者だけではなく被害者も)やその家族の住所や勤務先・学校等を確認し、ネット上にあげるといった動きが活発化しています。ひとたび事件・事故の当事者となれば、加害・被害の立場を問わず、個人情報が出やすく暴かれ、それが独り歩きし、時には誹謗中傷の的となる社会のなかで、「秘密」を守ることは非常に困難となり、家族メンバーに大きなストレスを強いることになっていると感じています。

家族メンバー内における秘密

前述した矯正施設入所については、家族内に当事者の子ども世代、当事者の祖父母世代が含まれる場合、幼少・高齢といった事情を鑑みて、子ども世代・祖父母世代には長期出張・入院による不在であるという旨を伝え、「秘密」にされていることもあります。この場合、秘密を保持する立場の家族メンバーには、日常生活の端々に気を配らねばならないという点で、家族メンバー外への秘密とは異なる苦労が求められます。

矯正施設以外の「家族メンバーの事情」が特定の家族のみ「秘密」にされるということも往々にして見られます。治癒が難しい病気(余命)などは、当事者に対しても伏せられていることがあります。

「家族関係の事情」が「秘密」となっていることもあります。母親が子どもを出産後離婚し再婚、2人目の夫とその子どもが養子縁組をしたケース等において、子供には養父であることを一定期間伏せているといったこともあるでしょう。

家族メンバー内における「秘密」の取り扱いからは、その家族のなかの関係性が見て取れることも往々にあります。

家庭における大人世代が対処しかねている家族や家庭における困りごとについて、子ども世代に「誰にも言わないでね」というかたちで「秘密」を伝えている家庭においては、親世代などの大人が適切に機能せず、子ども世代が年齢不相応の悩みを抱えることとなります。昨今解決すべき課題とされている「ヤングケアラー」は、大人世代が不在という場合に限り発生するだけではなく、大人世代がしかるべき役割を果たせない場合にも発生していることに、我々は心をいたすべきでしょう。

さらに踏み込めば、不適切介護や虐待が発覚しづらいのは、「誰にも言っはいけない」「内緒」という言葉によって、不適切介護や虐待をする側がされる側を縛っていることもその理由とを考えています。

家族における「秘密」については、その内容だけではなく、家族における「秘密」の取扱いという点に、家族の関係性が反映されていると考えます。これについては以下 4 で言及していきます。

4 「どうすればよかったか？」 家族のなかの「秘密」そして「嘘」

藤野監督の家庭における「実姉の統合失調症の発症」は、において四半世紀にわたり保持されてきた「秘密」そして「嘘」であると私は考えています。

実姉の発症時、監督はまだ高校生でした。何が大変なことが起きているに違いないとは感じているはずなのに、それを「秘密」にされる不安の大きさは、当時の写真のなかで、監督だけが目をそらしている映画ポスター等からも感じられるところです。

家族メンバー内における「秘密」の取扱いからは、その家族のなかの関係性が見て取れることも往々にある、ということを先に述べさせていただきました。理解できるかどうかは関係なく「だって家族だからあたりまえ」と「秘密」を共有するあるいは(共有を強いる)ことは、風通しのよい関係性でも、家族の団結が強固というわけではありません。子ども世代など心理的な発達途上の家族メンバーに対する養育上の配慮として「秘密」を伝えないということは、家族関係において健全と考えられることであり、むしろ、子ども世代をも巻き込んだ「秘密」は、家族関係を一見強固にするように見えても、それが理解できない場合はなおのこと、子ども世代の不安・負担になるのではないのでしょうか。

姉の統合失調症の急性症状と思われるものが出たのは昭和 58 年(1983)年、監督が高校時代、実姉が医学生の時でした。監督の実父は単身赴任中であり、監督は実母と相談し救急車を要請し、実姉は病院に搬送されます。しかしながらその翌日には単身赴任先から帰省した実父が実姉を連れ帰り、「まったく問題ない」と説明されます。監督は納得がいかないものの「父がそういうなら」とこの状況を受け入れる一方、以後、「一体何が本当なのかわからない」状況で日々を送ることになります。実姉と実母だけを自宅を置いておくことが不安で、自宅通学が可能な北海道大学に進学するものの、同じ大学内で実姉のことが噂にもなっており、「姉さんが精神障害ならお前もか」と教官からいわれるなど、家庭のことに加え自分自身の将来についても不安が重なっていきます。なにより、「病気でないことの根拠」を、医学部卒業資格や研究従事求めた実父母の対応については、高校時代より大きな疑問を持つようになっていきます。

監督の高校生～大学生時代の不安や混乱は、実姉の症状起因の言動がもたらす混乱よりも、親世代から、大切な家族メンバーである実姉の状態し、到底納得できないような「秘密」を共有することを強いられたからではないかと私は考えています。「精神分裂病」という言葉が日本精神神経学会によって「統合失調症」に変更されたのが H14(2002)年、実姉の急性症状発症はそれより約 20 年前であり、スティグマはより強いものだったと推察されます。実父母は基礎医学の研究者であり、「様々な状況が発生しているけれども、問題ない」と言い切ることは、信念や妄信ではなく、監督に対して「嘘」の共有を迫っているように感じました。

ここでは仮に、「秘密」を、その内容に関して一定の真実性があるもの、あるいは、真実であると信じられているものとし、「嘘」はその内容に真実性がないものとするれば、家族メンバー内でそれを保持し続けることが困難であるのは、「嘘」の方ではないかと私は考えています。

なぜならば、違和感を持ちながらもそれに疑問を發することなく一定の状態にとどまるこ

と、家族間のパワーバランスにゆがみが生じてくるのが往々にしてあります。一見安定しているようにみえても、それは「嘘」を中心核にした凝集に過ぎないかもしれないのです。そして、その凝集のなかでは、家族メンバー4人が課題を解決できないまま固まっている状態だと感じました。

「連載②:家族における「ケア」の在り方 映画「どうすればよかったか」から考える」でも述べましたが、実姉、そして実姉の疾病のことを、それが精神科医という専門家に対してですらも漏らさないというこの父母の姿勢は、実姉の弟たる監督に対し秘密をつくり、当然ながら家庭のなかではそれが『秘密』であるがゆえに、家族メンバーがそれを抱え込むということになっていきます。つまり、家族メンバーの突然の不調に対して不安を覚えている10代の子どもに、十分な説明がされないまま家庭の秘密を守る共犯者を担うような役割が科されてしまうのでした。家族メンバーの不調や不在などを外に漏らさない(話さないなど)よう秘密を抱えて生活することを(暗にはあっても)迫ることは、不調などを抱える当事者にとっても不利益なばかりか、他のメンバー、特にその不調による影響を最も被りやすい立場の者や、若年の者には、ある意味ケアを担うよりも過酷なものということはいうまでもないでしょう。

ただ、監督自身がその状態に生きづらさを感じ、自身の目線と生活場面を家族以外の場に求める、具体的には、ボート部に入部し家族と距離を置いたことが、実父母と実姉をつんでいた「嘘」という鎖からの脱出の端緒となっています。健康な家族メンバーが「嘘」の外に身を置くことで、外部からの支援が入り、「嘘」が明らかになることも往々にあります。

監督が選択したのは、「嘘」に絡み取られた家族からの断絶でもなく、告発でもなく、カメラ越しの対話でした。そうした形だからこそ、家族メンバーとしての関わりを続けることができたのかもしれないと感じています。

5 おわりに

困難を抱えた家族について、「毒親」「絶縁」といった、ネガティブなパワーワードで「判断する」ことが、日常会話等で広まってきたのはここ10年ぐらいでしょうか。しかしながら、「判断する」だけでは状況は改善しませんし、距離を置くことはできても法的な「絶縁」はありえません。「どうすればよかったか」を撮影した藤野監督も、大学卒業後一度は首都圏で就職し生育家庭を離れるものの、映画という手法を通して、自分の生育家庭や家族関係に向き合っておられます。家族を考える際には、家族の属性だけではなくその関係性、そこに「秘密」や「嘘」があるとすればその取り扱いがどうなっているのかという点に目を向けることが必要ではないでしょうか。

参考

映画「どうすればよかったか」

書籍「どうすればよかったか」(藤野知明)

これまでの連載

30号:連載1:更生保護制度とは何か

31号:連載2:更生保護を支える人々

32号:連載3:つながる・つなげる ～現代社会とボランティアについて～

33号:連載4:「共同体」における「排除」と「包摂」という関係性 「遠野物語」から考える (前)

34号:連載5:「共同体」における「排除」と「包摂」という関係性 「遠野物語」から考える (後)

- 35号:連載 6:介護は誰が担うべきか～家族・親族・地域社会の関係性を踏まえた一考察～
- 36号:連載 7:対人援助の場面における「専門家」と当事者等との関係性について
～家族・親族・地域社会の関係性を踏まえた一考察～
- 37号:連鎖 8:「地域」を支える縁のかたち 血縁・地縁,そして「新たな縁」
- 38号:連載 9:「29人と19人」～この数字が示すもの
- 39号:連載 10:血縁あるいは家族について
- 40号:連載 11:対人援助職が家族のケアを担うとき(1)
- 41号:連載 12:対人援助職が家族のケアを担うとき(2)
- 42号:連載 13:「開く」と「閉じる」こと
- 43号:連載 14:『「開く」と「閉じる」こと』
- 44号:連載 15:『つながりが支えるところ』
- 45号:連載 16:『「見える」と「見えない」こと』。
- 46号:連載 17:「地域社会」との「関わり方」を考える
- 47号:連載 18:「地域社会」で生きるということ
- 48号:連載 19:「自分は誰かとつながっている」という感覚があるかということ
- 49号:連載 20:『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽について
- 50号:連載 21:Society から Home へ矮小化していく社会
- 51号:連載 22:「自助、共助、公助」の他に、制度が既存のものとして含んでいる「家族助」について
- 52号:連載 23:自分が「知っている」だけの世界で生きることの危うさ
- 53号:連載 24:「知らないことが不安や排除につながる」ということ
- 54号:連載 26:「今の社会」に対する若者の不安に、大人としてどう向き合うのか
- 55号:連載 27:「理想とされる家族は今や『描かれるもの』の中にあるものなのか」
- 56号:連載 28「自分には支えてくれる人がいる」「まだできることがある」と誰もが感じることで
きる社会へ(連載 29 と記載していますが 28)
- 57号:連載 29「選べない日々」を過ごす人々への「まなざし」
- 58号:連載 30 改めて「介護は誰が担うべきか 家族・親族・地域社会の関係性を踏まえた一考察」
- 59号:連載 31:非行とは行うものなのか巻き込まれるものなのか」
- 60号:連載 32:家族における「ケア」の在り方 映画「どうすればよかったか」から考える
- 61号:連載 33:みまもり「みまもる」ということば
- 62号:連載 34:「若者と薬物依存」について、地域社会でどう向き合うのかと
- 63号:連載 35:薬物依存症当事者の方の経験と人生に触れる
- 64号:連足 36:家族のなかの「秘密」や「嘘」 続・映画「どうすればよかったか」から考える